

## シンポジウム「東南アジアのイスラーム」総括

中村 光男

三つの報告と三つのコメントのまとめ役を仰せつかったのですが、お聞きのように、地域や問題のフォーカスという点で、いろいろと多面的なアプローチがなされており、それを全部短い時間で旨くまとめるということは難しいので勘弁させて載せたいと思います。むしろ私なりに、今日聞かせて戴いた報告とコメントにたいするコメントと、私どもが進めてきました東南アジア・イスラーム研究の現状を踏まえての問題提起を幾つか行って、総括に替えさせて載せたいと思います。

まず第一に、私の総括の前提としまして、私どもがここで報告し討議をしている東南アジアにおけるイスラームという研究主題は、日本の学界の中ではまだまだ若い、研究史の積み重ねの上からみると、まだまだ歴史の浅い領域であることを強調したいと思います。従って、われわれが当面討議すべきことは、研究の中身そのものばかりでなく、どういう研究のアジェンダ=議題、研究手順を組めばよいのか、どういうアプローチをすればよいのか、という研究の基本的な構え、アプローチ、資料、データ、研究の道具に関する事柄であるということでもあります。学問が若いときには必ずそのような議論が必要だと思えます。私どもの研究は、まだ、そういう段階にあるのではないかと思います。

第二に、上記のことを重々承知した上で、私がもうひとつ強調したい点は、私たちが今日取り上げました東南アジアのイスラームという研究課題の持っている緊急性、現代性であります。冒頭の趣旨説明のところで早瀬先生が触れられたように、現在、全世界人類50数億人のうち10億人がイスラームを世界観として生きている人たちであります。その10億人のうちの2億人近くが東南アジアに住んでいます。日本のすぐ南の地域、しかもわれわれにとって政治的・経済的に、また、文化的にたいへん親しい関係にある東南アジア地域に、2億人

に近いイスラーム教徒が生活をしているのです。ところが、この人たちの生活や考え方について、私ども日本人は依然としてたいへん無知であります。端的に申しまして、この春、卒業旅行でインドネシアに行こうとしている大学生たちに、いったいインドネシアの主要な宗教は何かと尋ねて見た場合、イスラームだと答え得る人は、恐らくそんなにいないだろうと思います。むしろ、インドネシアというとバリのイメージが前面にでてきてしまって、イスラームはほとんど隠されてしまっています。インドネシアに行ってみて、初めてイスラームがドミナントであることに気付いてびっくりするということになります。このことから、隣人理解の上で、われわれの研究課題の緊要性がでてくると思います。

第三に、今日の報告やコメントの中で、もう一つ明らかになってきました点は、人口の面でこれ程多数のイスラーム教徒が現在東南アジアに存在しているというばかりでなく、実は、この地域のイスラーム化の歴史、イスラームが到来し定着していった歴史がかなり深く、長いものであり、この歴史的過程の理解が今日のこの地域のイスラーム社会の理解に不可欠だということだということです。しかも、いろいろと報告されましたように、西欧の諸勢力＝ポルトガル、スペイン、オランダ、イギリス、フランスなどが到着するずっと以前にイスラームの文明がここに到来しており、各地方でイスラーム社会が成立していったのであります。このような過程が、東南アジアの各地域におけるイスラームの伝統を形づくっている、文化の基層をなしています。われわれは、この歴史的過程についても、またかなり無知であったということがいえるのではないかと思います。この点、今後もっと第一次史料にもとづいた掘り下げが必要ではないかと思います。それから、そのような長い伝統をもちながら、いま最後のフィリピンのところのお話にありましたように、さらに西欧の植民地化によって東南アジアのイスラーム社会が様々な変容、分断、弱体化された経験を経てきているということです。

第四に、その歴史を踏まえた上で、第二次世界大戦後、ネーション・ステイト＝国民国家の建設が進みました。そして、その国民国家が1960年・70年代、

さらに80年代を通じて急テンポでもって近代化、すなわち工業化、産業化、近代的な諸制度の導入ということを進めてきています。御存知のように東南アジアは経済成長率からみて世界で有数のところであります。二桁の成長率を続けておりますマレーシア、インドネシアは一桁ですが、いずれもたいへん高度な成長を続けております。東南アジアを頻繁に旅行される方々はすでに感じられていると思いますが、東南アジアの社会はいわば私たちの面前、眼前でもって日々刻々変わっていつています。これは、みなさん共通の印象としてお持ちだと思えます。そういう中で、問題は、われわれがいままで人類の歴史に関する理念的な枠組みとしてもっておりました、近代化が進めば進むほど世俗化が進む、という常識が通用しない状況がでてきていることであります。すなわち宗教の復興であります。これはイスラーム世界において最も顕著であります。しかもインドネシアにせよ、マレーシアにせよ、またフィリピンの南部にせよ、そこで現在のイスラーム復興の先頭に立って旗印を抱えている人たちは、伝統的なイスラーム知識層の出身ではなくて、近代的な教育を受け、近代的な生活パターン、感覚を持った階層出身であるという状況がみられます。私どもがこれまでの常識としてきた近代化イコール世俗化ということがここでは通用しないのです。われわれの近代化論に対するチャレンジが東南アジアで出現しているといっているのではないかと思います。

そして、第五に、高度な工業化、あるいは情報化革命と言われ技術革新にともないまして、私どもの住んでいる地球がいわばひとつの単一のインフォメーション・ネットワークでつながれる状況になってきていますし、また経済もボーダーレスになってきています。そういう状況の中で、これまで私どもが人類社会の構造を見る上である程度常識としてきた、中心と周辺という枠組みでもってイスラーム世界を見るのが不可能になってきた、あるいはそういう見方が現実にはあわなくなっている、と申し上げてよいかと思います。あるいはそもそもイスラームの社会に対するアプローチとしては、このような枠組み自体に始めから問題があったのではないかと思います。どういうことかと申しますと、先ほどから報告と討論の中でできましたが、イスラームの場合に

規範とするところはコーランであり、またハディースであり、またそれらに基づいて長い世代に亘って作り上げられてきたイスラーム法の体系であり、また個人の内面に深く入りましたスーフイズムではありますが、これらの諸伝統が、いわば一つのパッケージとなって様々な地域にもたらされます。そして、そのパッケージが種となって土着化し、根を張り、芽を出し、成長して、イスラーム圏の一部となっていく。この場合に、どこが中心でどこが周辺という問題のたて方はできなくなるのではないかと思います。さらに現実には先ほど申しました交通通信手段の加速的な発達によって、一つのボーダーレスなムスリム情報社会、グローバルなムスリムのネットワークができてきておりまして、これを無視した中心対周辺というアプローチは無理になってきていると思います。

最後に分析の枠組みの問題としまして強調したい点があります。私どもがイスラーム社会を対象として研究する際に、私どもが出発点としますのは、文化人類学や歴史学、あるいは社会学や政治学という社会科学、人文科学の学問であろうと思います。その際、普通私どもはイスラームやムスリムの社会についてほとんど無知の状況で出発します。しかし、無知であるということは完全に純粋無垢で無知であるわけではなく、私どもはイスラーム社会に関する先入観や偏見をもって現実に対することになります。その際、本当に意味のある情報や知識を得るためには、対象の社会で生きている概念や範型を新たに学んでいくと同時に、古いものをどんどん捨てていかなければなりません。古いものがいわば眼を覆っている膜みたいなものになってしまって、新たな現実が見えてこないということがしばしばあると思います。

先程のマレーシアの報告と討論の中で出たクンドゥリという共食儀礼、即ち共同の食事をしてお祈りを捧げるという儀礼の例があります。御存知の方もいらっしゃるかと思いますが、この共食儀礼はアメリカの人類学者クリフォード・ギアツの『ジャワの宗教』というモノグラフによりますと、あたかもジャワ人プロパー、あるいはジャワ人独特の儀礼として描かれています。ところが、先程申しましたように、このような民族誌を先入観とせず、イスラーム社会の現実をみますと、隣人と親しみあうこと、食物を分かち合うこと、死者の魂

を含め互いの平安を祈ること（ドア・スラマタン）という規範は、イスラーム社会共通の規範であり、しかも、これはコーランを始め預言者ムハンマドの言行録のハディースにも繰り返し繰り返しでてきている規範であることがわかります。このような規範が核になって各地のイスラーム社会で多様な形で共食儀礼の慣習化、制度化が行なわれてきたと見てよいでしょう。

イスラーム社会に接近する場合には、このように常に共通の規範の核の部分と制度的・個別文化的に多様化した形態の両側面を見ていかなければならないと思います。このようなアプローチのモットーはインドネシアの国是をひっくり返したものだと思います。インドネシアの国是は御存知のように Unity in Diversity 「多様の中の統一」と申しますが、イスラームの特徴は、これをひっくりかえして、 Diversity in Unity 「統一の中の多様」といってよいと思います。一つの基本になる規範が、さまざまな状況、さまざまなコンテキスト、さまざまな社会的・文化的な環境の中で、多様に解釈・制度化されていて、一見したところ別々のものに見えるけれども、実は同根の規範からできている――イスラーム社会にはこのようなことが実に沢山あります。これらにおける普遍性と個別性をきちんと腑分けすることによって、私どものイスラーム社会の理解は深まります。しかし、このようなアプローチを進めるためには、私ども自身のイスラームの規範に関する知識そのものが深まっていかなければなりません。一言でいえば、研究者はコーラン、ハディースに親しむ必要があるということです。現地語だけでなくアラビア語の素養も必要とされます。このような研究道具、方法論の構えの要請がイスラーム社会研究の中には出てまいります。

例えば、この共食儀礼の問題以外にも、同じようなことがウラマーというイスラームの社会に共通する独特のカテゴリーの人間の在り方、すなわちイスラーム知識人、イスラーム学識者、とくにイスラーム法を中心にした学識者というカテゴリーの人間の存在とその社会的役割についても言えるかと思います。ウラマーはイスラーム社会がイスラーム社会としてのアイデンティティを維持して、自己を文化的に再生産（教育）するためには不可欠の要素であります。

この点は、三人の報告者の報告の中で多かれ少なかれ触れられたと思います。ところが問題は、ウラマーの存在、その学問・教育体系が特定のローカル・コミュニティには限定されておらず、グローバルなネットワークで繋がれているものなので、村中心のフィールド・ワークでは現われてこない場合があることです。そのような場合、しばしばウラマーの存在や学問を捨象したエスノグラフィが出てきて、しかもそれを土台にした一般化が行なわれたりします。結果はイスラーム社会の知的ダイナミズムに関して、きわめて現実を矮小化した一面的なイメージが流布されることになってしまいます。このような危険を避けるためには、私どもはイスラームの共通の核になる部分を意識的に踏まえ、その上で研究対象の現実の diversity の部分をみるという両方を押さえたアプローチで、実証的研究を進める方向性が今後とも必要とされていると思っております。

以上のように報告とコメントに触発された問題提起という形で今後の研究の方向について幾つかのポイントを提起させて戴きました。これで総括に替えさせて戴きたいと思います。